英会話を通じたコミュニケーション意識の変容に関する研究
～茨城県 英語インタラクティブ・フォーラムを題材に～

遠藤　忍（慶應義塾大学 大学院 政策・メディア研究科 大学院生）

キーワード：スピーキング，コミュニケーション意識，英語インタラクティブ・フォーラム

１．はじめに

中学校学習指導要領の外国語科では，「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」と「コミュニケーション能力の基礎」を養うことが目的とされている．本研究ではこれに着目し，中学校での英会話活動を通じて，生徒たちのコミュニケーションに対する意識の変容を特定するために，コミュニケーションに対する態度や意識について質問紙をはじめとする調査を行った．

２．調査事例：英語インタラクティブ・フォーラム

本研究では事例として，茨城県で行われている「英語インタラクティブ・フォーラム」(以下，I.E.F.と略す)を取り上げた．中学２・３年生の出場者が，3～4 人のグループで与えられたテーマについて自由に会話をする．審査項目は「表現力」「豊かで適切な内容」「協調性のある親しみやすい態度」であり，これらは「コミュニケーションの関心・意欲・態度」と密接な関連があると指摘されている(長澤・田邉, 2001).

３．出場生徒に対する質問紙調査

(1) 調査設計と実施概要

本研究では，2010 年 7 月 5 日に実施された I.E.F.茨城県古河市内大会に出場した生徒を対象として質問紙調査を行った(n=42)．調査時点は，大会 1 ヶ月前(事前)，大会当日(直後)，大会 3 ヶ月後(事後)の 3 時点とした．「自己決定理論」(Deci & Ryan, 1985)と，「二要因モデル理論」(市川, 2001)を参考に，6 件法の設問を設計した．また，数値回答を補うコメント欄や自由記述設問を設けた．

(2) 量的分析の結果と考察

数値の回答について，対応のある一要因分散分析を行った．結果，ほとんどの設問で高い平均値を維持していた．しかし一部で数値が有意に下がっている項目があった．ここから，出場した生徒の意識や動機づけは維持されたものの，特に当日の出来については自信や積極性を持てなかったと考えられる．

(3) 質的分析の結果と考察

各設問のコメント欄，および自由記述欄の回答を分析したところ，1) 生徒たちの動機づけは，主に関係性の欲求の充足によって維持されていた，2) 生徒たちの意識は，英語の知識やスキルという側面から，対話の際の態度や方略という面に向くようになった，3) 生徒たちは英語で会話することを，楽しいだけでなく難しいものとしても捉えるようになった，ということが導かれた．

４．おわりに

以上のことから，I.E.F.に出場した生徒たちのコミュニケーションに対する意識は，英語そのものよりもより広範なものに変容したということが伺える．この傾向は，I.E.F.に向けた練習の観察や，出場経験者へのインタビューからも見受けられる．以上について，発表では更に詳細に報告する．

５．参考文献

Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). Intrinsic motivation and self-determination in human behavior. New York: Plenum.

市川 伸一. (2001).『学ぶ意欲の心理学』. PHP 研究所.

長澤 邦紘・田邉 一男. (2001).「Interactive english forum 1999:茨城県における実践的コミュニケーション能力育成の試み(その 1)」. 茨城大学教育学部紀要.教育科学, *50*, 129-144.

長澤 邦紘・田邉 一男. (2001).「Interactive english forum 1999:茨城県における実践的コミュニケーション能力育成の試み(その 2)」. 茨城大学教育学部紀要.教育科学, *50*, 145-158.

英会話を通じた
コミュニケーション意識の
変容に関する研究

茨城県 英語・インタラクティブフォーラムを
題材に

遠藤　忍
慶應義塾大学ＳＦＣ
政策・メディア研究科
enshino@sfc.keio.ac.jp
http://enshino.biz/

本日のアジェンダ

- 01 はじめに
- 02 調査設計
- 03 量的分析
- 04 質的分析
- 05 まとめ

- 発表要項p.43をご覧下さい
- ★マークのスライドでは
  お配りしている補足資料をご覧下さい

遠藤　忍
慶應義塾大学ＳＦＣ
enshino@sfc.keio.ac.jp

はじめに 01□
調査設計 02□
量的分析 03□
質的分析 04□
まとめ 05□

[はじめに]

遠藤　忍
慶應義塾大学ＳＦＣ
enshino@sfc.keio.ac.jp

はじめに 01□
調査設計 02□
量的分析 03□
質的分析 04□
まとめ 05□

はじめに

本研究の目的と背景

■ 目的：**外国語教育における会話活動を通じて，学習者のコミュニケーションに対する意識の変容を特定する**

■ 背景：「積極的にコミュニケーションを図ろうとする**態度**」と「コミュニケーション**能力の基礎**」を養う

(中学校学習指導要領 外国語編 目標)

遠藤　忍
慶應義塾大学ＳＦＣ
enshino@sfc.keio.ac.jp

はじめに 01□
調査設計 02□
量的分析 03□
質的分析 04□
まとめ 05□

はじめに
研究対象

- 英語インタラクティブ・フォーラム
  - Interactive English Forum (I.E.F.)
  - 茨城県教育委員会主催
- 中学生(2・3年生)を対象とした取組み
  - 県内公立中学校は全校参加
  - 校内代表→市内予選→地区予選→県大会

遠藤　忍
慶應義塾大学ＳＦＣ
enshino@sfc.keio.ac.jp

はじめに 01□
調査設計 02□
量的分析 03□
質的分析 04□
まとめ 05□

はじめに
研究対象

- 英語インタラクティブ・フォーラム
  - Interactive English Forum (I.E.F.)
  - 茨城県教育委員会主催
- 学年別・ランダムな3~4人のグループで, 与えられたテーマに関して自由に会話を行う
  - テーマは事前提示、組み合わせは当日提示
- 初対面状況での会話

遠藤　忍
慶應義塾大学ＳＦＣ
enshino@sfc.keio.ac.jp

はじめに 01□
調査設計 02□
量的分析 03□
質的分析 04□
まとめ 05□

はじめに
研究対象

■ 英語インタラクティブ・フォーラム

- ■ Interactive English Forum (I.E.F.)
- ■ 茨城県教育委員会主催

■「英語を使って双方向性を重視したコミュニケーション能力を高める」

- ■「表現力(通じやすさ, 自然さ, 正確さ)」
- ■「豊かで適切な内容」
- ■「協調性のある親しみやすい態度」

遠藤　忍
慶應義塾大学ＳＦＣ
enshino@sfc.keio.ac.jp

はじめに 01□
調査設計 02□
量的分析 03□
質的分析 04□
まとめ 05□

はじめに

研究(調査)の概要

■ 英語インタラクティブ・フォーラムに出場する生徒の、
・I.E.F.に対する意識
・日常コミュニケーションへの意識
の変容を、定量的・定性的に調査

■ 2010年7月5日実施 茨城県古河市内大会
■ 市内９中学校・各校６名＝５４名中、
有効回答数 N＝４２

遠藤　忍
慶應義塾大学ＳＦＣ
enshino@sfc.keio.ac.jp

はじめに 01□
調査設計 02□
量的分析 03□
質的分析 04□
まとめ 05□

[調査設計]

遠藤　忍
慶應義塾大学ＳＦＣ
enshino@sfc.keio.ac.jp

はじめに 01□
調査設計 02□
量的分析 03□
質的分析 04□
まとめ 05□

調査設計

先行研究 - I.E.F.について

■ I.E.F.の審査項目は、

・「コミュニケーションの
関心・意欲・態度」

・さまざまな方略を用いること
・社会言語的正確さ

との関連性がある(長澤・田邉 2001)

コミュニケーション能力・４要素※のうち…

「社会言語能力」「方略能力」を重視

※ Canale & Swain1980, Canale 1983

遠藤　忍
慶應義塾大学ＳＦＣ
enshino@sfc.keio.ac.jp

はじめに 01□
調査設計 02□
量的分析 03□
質的分析 04□
まとめ 05□

先行研究 - I.E.F.について

■ I.E.F.の審査項目は、

・「コミュニケーションの
関心・意欲・態度」

・さまざまな方略を用いること

・社会言語的正確さ

との関連性がある(長澤・田邉 2001)

**大会とその練習過程を通じた,
他者とのコミュニケーションに対する
意識の変容が期待できる**

遠藤　忍
慶應義塾大学ＳＦＣ
enshino@sfc.keio.ac.jp

はじめに 01□
調査設計 02□
量的分析 03□
質的分析 04□
まとめ 05□

調査設計

先行研究 - 意欲・動機づけ①

- 「自己決定理論」(Deci & Ryan, 1985)
  - 自律性の欲求
  - 有能性の欲求
  - 関係性の欲求

→ 内発的動機づけの向上

- 日本人大学生の英語学習の動機づけ
  (廣森, 2005; 田中, 2009)

コンテストとしてのI.E.F.と合致

遠藤　忍
慶應義塾大学ＳＦＣ
enshino@sfc.keio.ac.jp

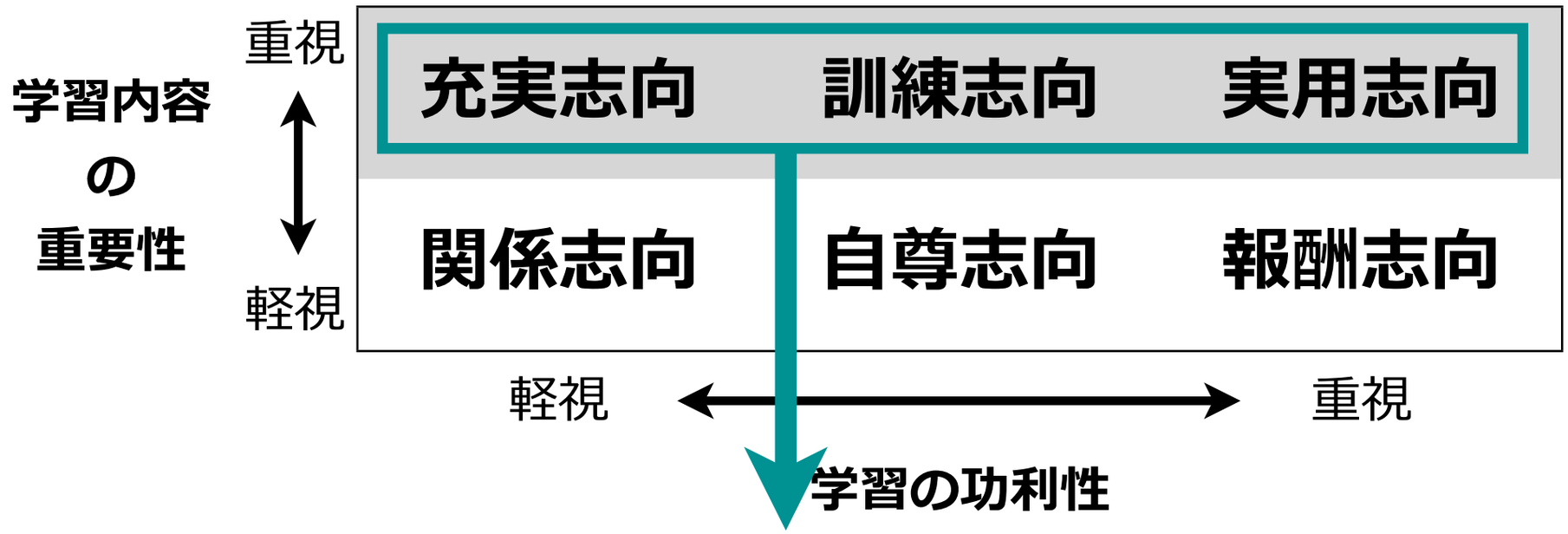
はじめに 01□
調査設計 02□
量的分析 03□
質的分析 04□
まとめ 05□

調査設計

先行研究 - 意欲・動機づけ②

■「二要因モデル理論」(市川, 2001)

- ■ 「内容関与的動機」
- ■ 「内容分離的動機」



I.E.F.の特徴に、より合致する

遠藤　忍
慶應義塾大学ＳＦＣ
enshino@sfc.keio.ac.jp

はじめに 01□
調査設計 02□
量的分析 03□
質的分析 04□
まとめ 05□

調査設計

質問紙設計 - 質問紙の構成

■ 目的：外国語教育における会話活動を通じて，学習者のコミュニケーションに対する意識の**変容を特定する**

↓ ↓ ↓

■ ３時点での調査の実施(田中, 2009)

- ■ 事前：2010年6月実施(本番１ヶ月前)
- ■ 直後：2010年7月5日 (本番当日)
- ■ 事後：2010年９～10月(本番2～3ヶ月後

遠藤　忍
慶應義塾大学ＳＦＣ
enshino@sfc.keio.ac.jp

はじめに 01□
調査設計 02□
量的分析 03□
質的分析 04□
まとめ 05□

質問紙設計 - 心理尺度の項目★

- １回あたり３×２×２＝12問
  - 「自己決定理論」と「内容関与的動機」
  - I.E.F.に対する意欲と
    日常のコミュニケーションに対する意欲

- 1~6の６件法
- 生徒に負担をかけない設問数
  ⇒コメント欄を全質問に付与

遠藤　忍
慶應義塾大学ＳＦＣ
enshino@sfc.keio.ac.jp

はじめに 01□
調査設計 02□
量的分析 03□
質的分析 04□
まとめ 05□

調査設計

質問紙設計 - 心理尺度の項目★

■ １回あたり３×２×２＝12問

I.E.F.に対する動機づけ	日常でのコミュニケーションへの動機づけ
自分から積極的に会話に参加したい(できた).	人と会話をするとき, 自分の好きなことを話したり聞いたりできると思う.
自分に自信を持って会話をしたい(できた).	相手に自分の話をしたり, 相手の話を聞いたりするとうれしいと感じる.
友人や見知らぬ人と仲良くなりたい(なれた).	会話することを通じて, いろいろな人と仲良くなることができると思う.
活動は楽しい(かった).	人と会話することが好きだ.
会話の仕方を身につけたい(ついた).	いろいろな人と会話をすることで, 会話の仕方や能力が身に付くと思う.
活動は役に立つと思う(立った).	他人とうまく会話できると日常生活や将来に役立つと思う.

遠藤　忍
慶應義塾大学ＳＦＣ
enshino@sfc.keio.ac.jp

はじめに 01□
調査設計 02□
量的分析 03□
質的分析 04□
まとめ 05□

質問紙設計 - I.E.F.への認識★

■ 各時点での生徒のI.E.F.に対する意識を問うため自由記述設問を設定

事　前	直後	事後
参加のきっかけ	できたこと	会話時の注意
達成目標	できなかったこと	学び・得たもの
練習・対策	参加の感想	参加の感想
心がけること	学び・気づき	前後の違い

遠藤　忍
慶應義塾大学ＳＦＣ
enshino@sfc.keio.ac.jp

はじめに 01□
調査設計 02□
量的分析 03□
質的分析 04□
まとめ 05□

調査設計
分析の方法

■ N=42 (学校の都合で回収不能分あり)

■ 定量調査：

・記述統計量

・**対応のある一要因分散分析**

■ 定性調査：

・KJ法を援用した、**コメントの考察**

遠藤　忍
慶應義塾大学ＳＦＣ
enshino@sfc.keio.ac.jp

はじめに 01□
調査設計 02□
量的分析 03□
質的分析 04□
まとめ 05□

[量的分析]

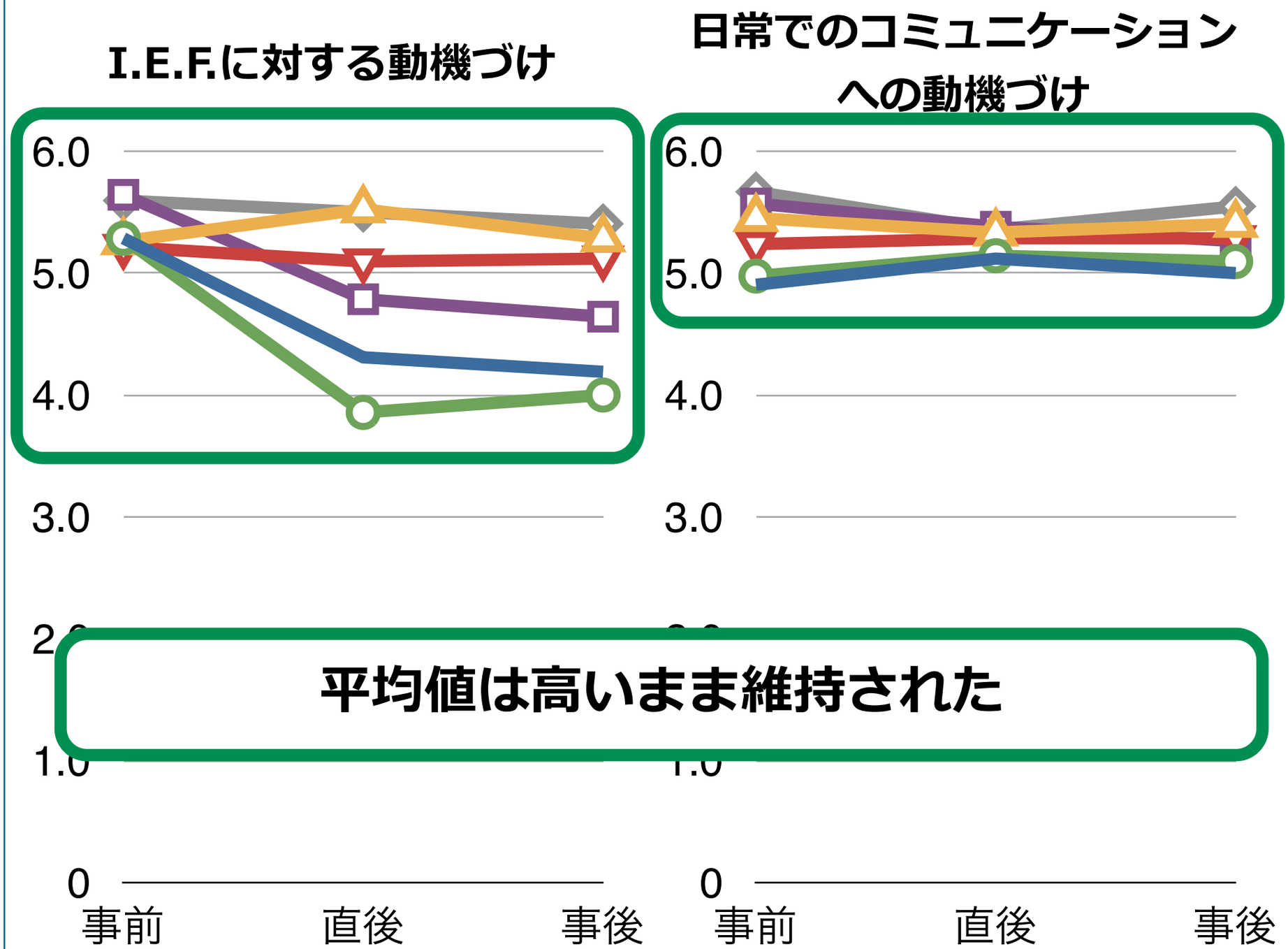
対応のある
一要因分散分析

遠藤　忍
慶應義塾大学ＳＦＣ
enshino@sfc.keio.ac.jp

はじめに 01□
調査設計 02□
量的分析 03□
質的分析 04□
まとめ 05□

対応のある一要因分散分析

平均値の高さ★

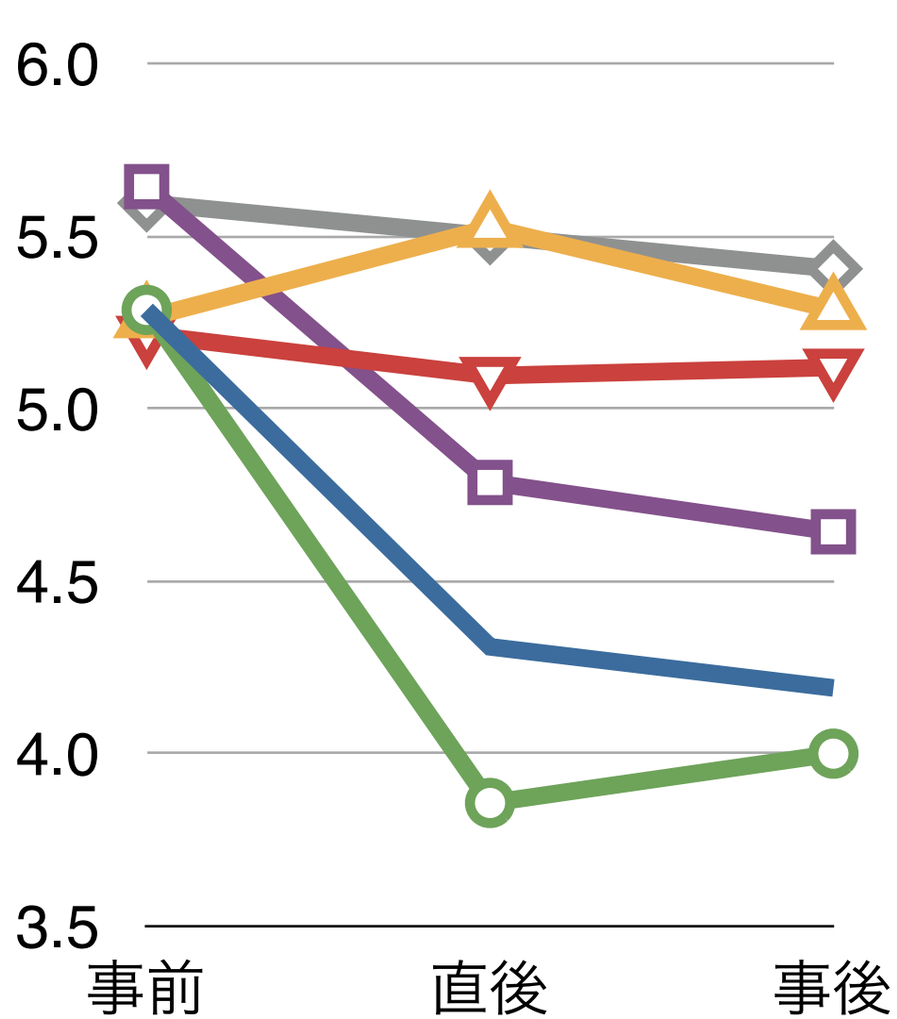


平均値は高いまま維持された

遠藤　忍
慶應義塾大学ＳＦＣ
enshino@sfc.keio.ac.jp

はじめに 01□
調査設計 02□
量的分析 03□
質的分析 04□
まとめ 05□

対応のある一要因分散分析
I.E.F.に対する動機づけ



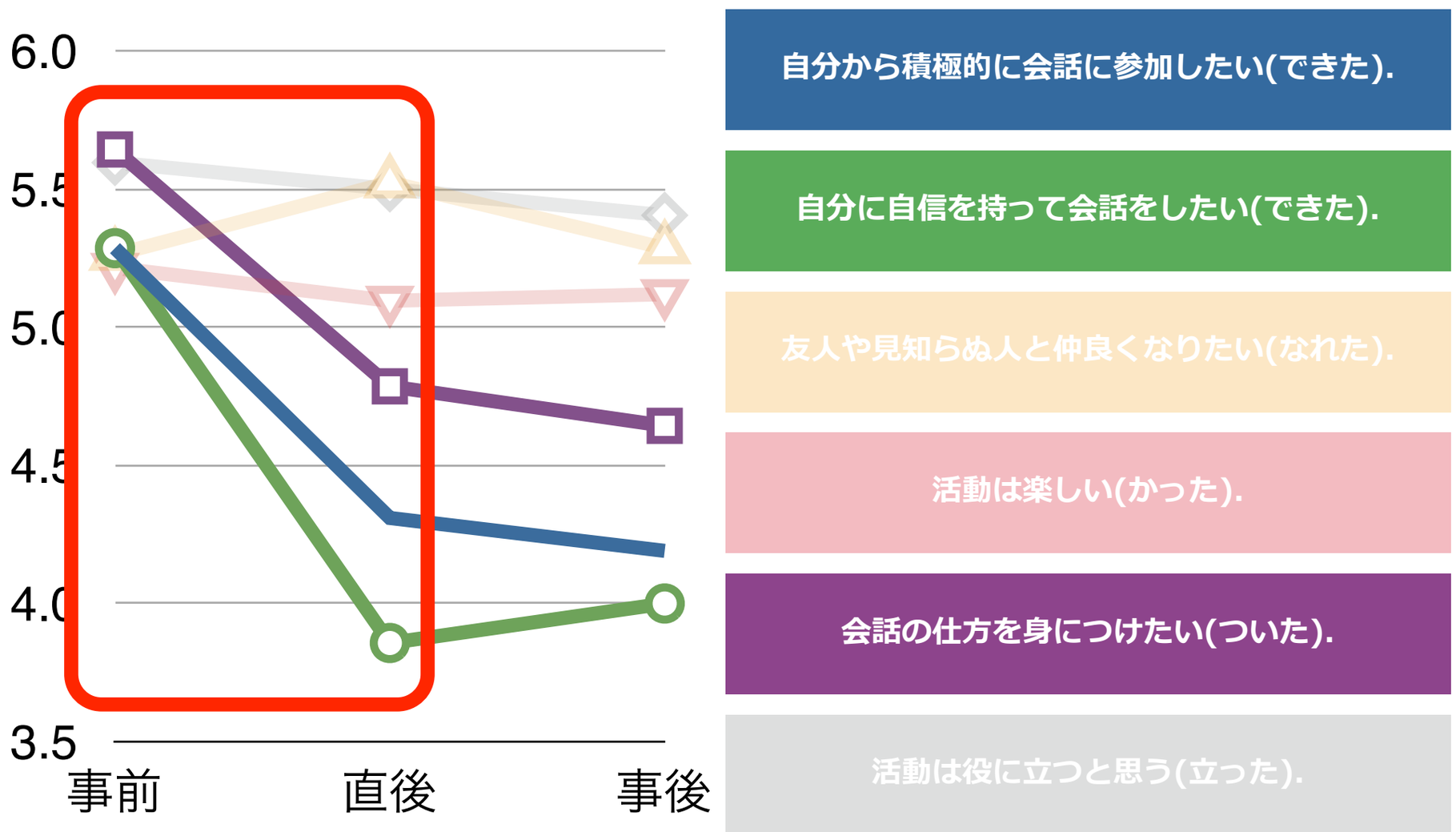
- 自分から積極的に会話に参加したい(できた).
- 自分に自信を持って会話をしたい(できた).
- 友人や見知らぬ人と仲良くなりたい(なれた).
- 活動は楽しい(かった).
- 会話の仕方を身につけたい(ついた).
- 活動は役に立つと思う(立った).

遠藤　忍
慶應義塾大学ＳＦＣ
enshino@sfc.keio.ac.jp

はじめに 01□
調査設計 02□
量的分析 03□
質的分析 04□
まとめ 05□

対応のある一要因分散分析
I.E.F.に対する動機づけ

事前→直後 (および事前→事後) の平均値が有意に低下



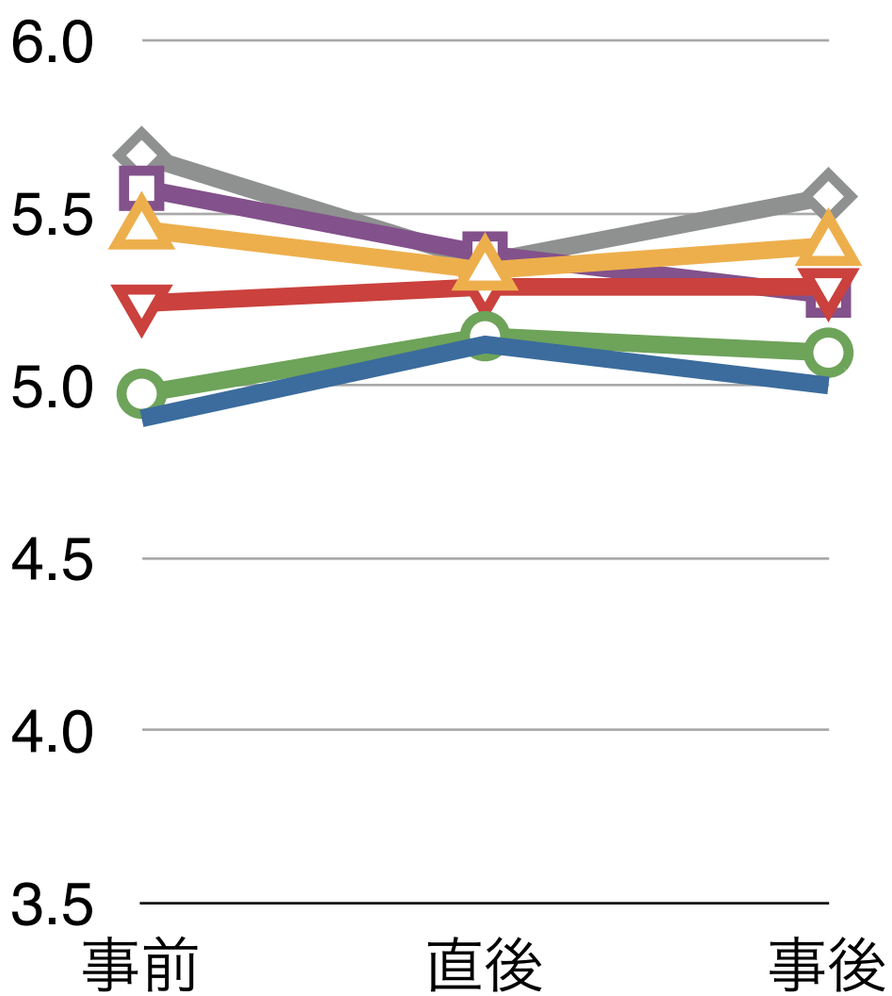
遠藤　忍
慶應義塾大学ＳＦＣ
enshino@sfc.keio.ac.jp

はじめに 01□
調査設計 02□
量的分析 03□
質的分析 04□
まとめ 05□

対応のある一要因分散分析

日常のコミュニケーションへの動機づけ

有意な変化は見られなかった



- 人と会話をするとき, 自分の好きなことを話したり聞いたりできると思う.
- 相手に自分の話をしたり, 相手の話を聞いたりするとうれしいと感じる.
- 会話することを通じて, いろいろな人と仲良くなることができると思う.
- 人と会話することが好きだ.
- いろいろな人と会話をすることで, 会話の仕方や能力が身に付くと思う.
- 他人とうまく会話できると日常生活や将来に役立つと思う.

遠藤　忍
慶應義塾大学ＳＦＣ
enshino@sfc.keio.ac.jp

はじめに 01□
調査設計 02□
量的分析 03□
質的分析 04□
まとめ 05□

対応のある一要因分散分析
結果の考察①

２つのグラフ共に…

平均値は高いまま維持された

「日常のコミュニケーションへの動機づけ」では…

有意な変化は見られなかった

遠藤　忍
慶應義塾大学ＳＦＣ
enshino@sfc.keio.ac.jp

はじめに 01□
調査設計 02□
量的分析 03□
質的分析 04□
まとめ 05□

対応のある一要因分散分析
結果の考察①

出場生徒の動機づけは
もともと高く

特に「日常のコミュニケーションへの動機づけ」では…
高いまま維持されていた

遠藤　忍
慶應義塾大学ＳＦＣ
enshino@sfc.keio.ac.jp

はじめに 01□
調査設計 02□
量的分析 03□
質的分析 04□
まとめ 05□

対応のある一要因分散分析
結果の考察②

「I.E.F.に対する動機づけ」では…

３項目で平均値が有意に低下

1-1: $F(2, 41) = 21.08$, $p < 0.001$ [5.29 / 4.31 / 4.19]
1-2: $F(2, 41) = 28.05$, $p < 0.001$ [5.29 / 3.86 / 4.00]
1-5: $F(2, 41) = 26.45$, $p < 0.001$ [5.64 / 4.79 / 4.64]

自分から**積極的に**会話に参加**したい** → **できた**

自分に**自信を持って**会話を**したい** → **できた**

会話の仕方を身に**つけたい** → **ついた**

遠藤　忍
慶應義塾大学ＳＦＣ
enshino@sfc.keio.ac.jp

はじめに 01□
調査設計 02□
量的分析 03□
質的分析 04□
まとめ 05□

対応のある一要因分散分析
結果の考察②

事前の期待に反して,
本番は積極性や自信をもって会話することができなかった

自分から**積極的に**会話に参加**したい** → **できた**

自分に**自信を持って**会話を**したい** → **できた**

会話の仕方を身に**つけたい** → **ついた**

遠藤　忍
慶應義塾大学ＳＦＣ
enshino@sfc.keio.ac.jp

はじめに 01□
調査設計 02□
量的分析 03□
質的分析 04□
まとめ 05□

[質的分析]
KJ法による
コメント分類

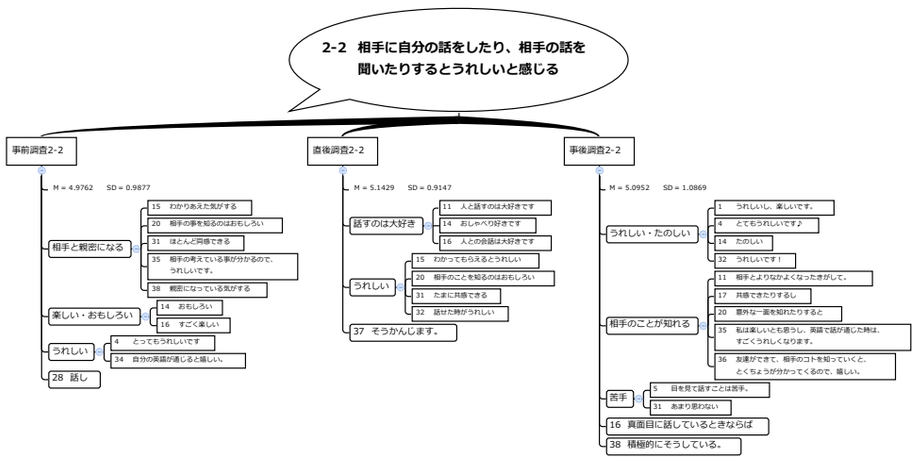
遠藤　忍
慶應義塾大学ＳＦＣ
enshino@sfc.keio.ac.jp

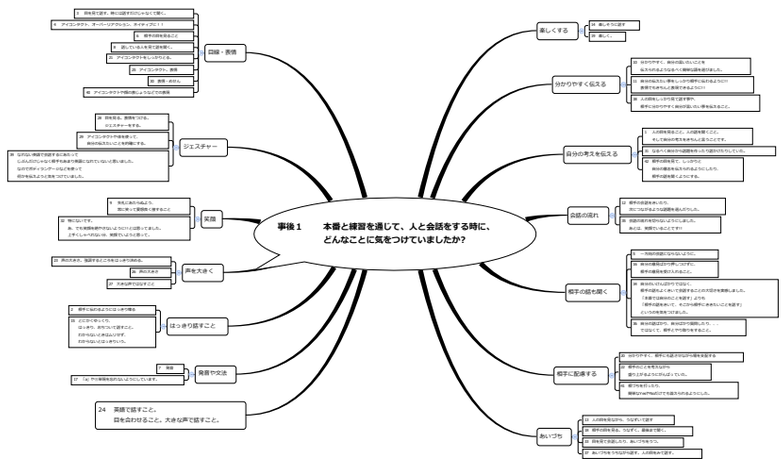
はじめに 01□
調査設計 02□
量的分析 03□
質的分析 04□
まとめ 05□

KJ法によるコメント分類

分類の方法

- 似たコメントの集合にラベル付け
  - 動機づけに関する質問：定量調査の補足
    →設問内で調査時点ごとに比較
  - I.E.F.に対する意識を問う自由記述設問
    →複数要素を含む場合は代表的なものを採用





遠藤　忍
慶應義塾大学ＳＦＣ
enshino@sfc.keio.ac.jp

はじめに 01□
調査設計 02□
量的分析 03□
質的分析 04□
まとめ 05□

KJ法によるコメント分類

動機づけ設問(表面)①

■ 英語に対する動機づけが高い

■ I.E.F.への動機づけを高める要因

→ 他校の生徒と仲良くなりたい

試験や勉強、将来に役に立つ

・友達ふえたらいいな～

・沢山の人とお話しをしたいからです。
受験のことや趣味について。

・英語の授業に役立てたい！

・将来使えそう

遠藤　忍
慶應義塾大学ＳＦＣ
enshino@sfc.keio.ac.jp

はじめに 01□
調査設計 02□
量的分析 03□
質的分析 04□
まとめ 05□

KJ法によるコメント分類
動機づけ設問(表面)②

■ 日常会話の苦手意識が少ない

■ 苦手意識のある生徒も, 積極的に
自分の苦手さをなくそうと意識

■ 他者と話すことを楽しんでいた

・話すのは大好きなので…(笑)

・びみょうですね。
でも楽しいときは多いです。

・相手の考えていることが分かるので、
うれしいです。

遠藤　忍
慶應義塾大学ＳＦＣ
enshino@sfc.keio.ac.jp

はじめに 01□
調査設計 02□
量的分析 03□
質的分析 04□
まとめ 05□

KJ法によるコメント分類
動機づけ設問(表面)③

■ 当日は自信や積極性を充分発揮できなかったと意識している。

■ ほぼ全員、他校の生徒の関わりへの充実感を持てていた。

・うまく伝わっているかどうか、あまり自信はありませんでした。

・練習ではもちろんのこと、大会でも席が近い人とは、日本語でも話してとても仲良くなりました

遠藤　忍
慶應義塾大学ＳＦＣ
enshino@sfc.keio.ac.jp

はじめに 01□
調査設計 02□
量的分析 03□
質的分析 04□
まとめ 05□

KJ法によるコメント分類

動機づけ設問(表面)④

■ コミュニケーション (相互に表現し理解すること) が重要であると意識

■ コミュニケーション行為を、英語に限定せずに捉えるようになった

・自分の考えを発言することは大切だと思います。

・実際に話してみないと分からないことが多いですから

・難しいけれど話すと楽しい

遠藤　忍
慶應義塾大学ＳＦＣ
enshino@sfc.keio.ac.jp

はじめに 01□
調査設計 02□
量的分析 03□
質的分析 04□
まとめ 05□

KJ法によるコメント分類

I.E.F.の意識の設問(裏面)①

■ 文法や形式の知識よりも,
英語に対する意欲や態度が高まった

■ 反省として, 会話の持続の難しさを
感じていた

・英語で人と話すことが楽しくなりました。

・相手にいってることがつたわらない
ちょっとかみくだいていえば…

・会話の切り返しがうまくできなかった

遠藤　忍
慶應義塾大学ＳＦＣ
enshino@sfc.keio.ac.jp

はじめに 01□
調査設計 02□
量的分析 03□
質的分析 04□
まとめ 05□

KJ法によるコメント分類

I.E.F.の意識の設問(裏面)②

■ 身体的な方略と態度的な方略の認知

■ アイコンタクトや相手の顔を見ること, 声量, 笑顔を示すこと

■ 話をしっかり聞く, 話を引き出すための配慮をする, 言いたいことをはっきり言う

・目を見る、表情をつける、ジェスチャーをする。

・大きく声を出すことができた

・自分の意見ばかり押しつけずに、相手の意見を受け入れること

遠藤　忍
慶應義塾大学ＳＦＣ
enshino@sfc.keio.ac.jp

はじめに 01□
調査設計 02□
量的分析 03□
質的分析 04□
まとめ 05□

KJ法によるコメント分類

I.E.F.の意識の設問(裏面)③

■ 参加した成果として,「他校の生徒との関わり」が挙げられていた

■「関係性の欲求」の充足

・知らない人と、
仲良くなることができた。

・いろいろな学校の人と
コミュニケーションをとることが
できたからです。

遠藤　忍
慶應義塾大学ＳＦＣ
enshino@sfc.keio.ac.jp

はじめに 01□
調査設計 02□
量的分析 03□
質的分析 04□
まとめ 05□

[まとめ]

遠藤　忍
慶應義塾大学ＳＦＣ
enshino@sfc.keio.ac.jp

はじめに 01□
調査設計 02□
量的分析 03□
質的分析 04□
まとめ 05□

まとめ

結論(本研究で得られた知見)

■ 英語そのものの気づきだけでなく,
アイコンタクトや**表情**,
相手の話を聞くなどの配慮,
そして**積極性**など外言語的な方略に
対する気づきを得ていた.

遠藤　忍
慶應義塾大学ＳＦＣ
enshino@sfc.keio.ac.jp

はじめに 01□
調査設計 02□
量的分析 03□
質的分析 04□
まとめ 05□

まとめ

結論(本研究で得られた知見)

■ 他者とのコミュニケーションに対して, **充実感**や**楽しさ**, **重要性**, **言いたいことが言えないという体験**を通じてその**難しさ**を感じていた

遠藤　忍
慶應義塾大学ＳＦＣ
enshino@sfc.keio.ac.jp

はじめに 01□
調査設計 02□
量的分析 03□
質的分析 04□
まとめ 05□

まとめ

結論(本研究で得られた知見)

■ 英語そのものの気づきだけでなく,
アイコンタクトや**表情**,
相手の話を聞くなどの配慮,
そして**積極性**など外言語的な方略に
対する気づきを得ていた.

■ 他者とのコミュニケーションに
対して, **充実感**や**楽しさ**, **重要性**,
言いたいことが言えないという体験
を通じてその**難しさ**を感じていた

意識・動機づけは,

英語という言語に対するもの

↓

より広範で基盤的な
コミュニケーションに対する意識へ

遠藤　忍
慶應義塾大学ＳＦＣ
enshino@sfc.keio.ac.jp

はじめに 01□
調査設計 02□
量的分析 03□
質的分析 04□
まとめ 05□

まとめ
課題と今後の展望

- 心理尺度項目には再検討が必要
  - モデルの用い方の「失敗」から生まれた結果
- 質的に出場者に関わる研究
  - 出場経験者へのパイロット調査を通じて、以下のことが分かってきた
    - 出場者は本番での会話に難しさを感じていた
    - 上位大会に出場するにつれて悔しさを感じていた
    - 出場者の学習スタイルはオーラル中心に陥りやすい
    - 進路選択への影響やロールモデルになる人との出会い
    - 学校を超えた関係性の構築ができる

遠藤　忍
慶應義塾大学ＳＦＣ
enshino@sfc.keio.ac.jp

はじめに 01□
調査設計 02□
量的分析 03□
質的分析 04□
まとめ 05□

まとめ

今後の外国語教育の意義

- 日頃のコミュニケーション行為を相対化するメタレベルの意識
- コミュニケーションに対する意欲や態度を高める
- 会話による学習活動で他者との接触場面を数多く持つ
- 成功体験・失敗体験を味わいながら態度と方略を身につけていく

遠藤　忍
慶應義塾大学ＳＦＣ
enshino@sfc.keio.ac.jp

参考文献★

Canale, M. (1983). Form communicative competence to communicative language pedagogy. In J. C. Richards, & R. W. Schmidt (Eds.), *Language and communication*. New York: Longman.

Canale, M., & Swain, M. (1980). Theoretical basis of communicative approaches to second language teaching and testing. *Applied Linguistics, I*(1), 1-47.

Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). Intrinsic motivation and self-determination in human behavior. New York: Plenum.

川喜田 二郎. (1967). 発想法：創造性開発のために. 中央公論社.

市川 伸一. (2001). 学ぶ意欲の心理学. PHP研究所.

廣森 友人. (2005). 外国語学習者の動機づけを高める3つの要因：全体傾向と個人差の観点から. 大学英語教育学会紀要, *41*, 37-50.

田中 博晃. (2009). 3つのレベルの内発的動機づけを高める−動機づけを高める方略の効果検証. *JALT Journal, 31*(2), 227-250.

長澤 邦紘・田邉 一男. (2001). Interactive english forum 1999:茨城県における実践的コミュニケーション能力育成の試み(その1). 茨城大学教育学部紀要.教育科学, *50*, 129-144.

長澤 邦紘・田邉 一男. (2001). Interactive english forum 1999:茨城県における実践的コミュニケーション能力育成の試み(その2). 茨城大学教育学部紀要.教育科学, *50*, 145-158.

遠藤　忍
慶應義塾大学ＳＦＣ
enshino@sfc.keio.ac.jp

関東甲信越英語教育学会 36回群馬研究大会　発表補足資料

英会話を通じたコミュニケーション意識の変容に関する研究

～茨城県 英語・インタラクティブフォーラムを題材に～

慶應義塾大学 大学院 政策・メディア研究科　遠藤　忍（enshino@sfc.keio.ac.jp）

資料１・質問紙調査の設問

I.E.F.やコミュニケーションに対するの動機づけに関する設問

I.E.F.に対する動機づけ

1-1 I.E.F.の活動では, 自分から積極的に会話に参加したい(できた).
1-2 I.E.F.の活動では, 自分に自信を持って会話をしたい(できた).
1-3 I.E.F.を通じて, 友人や見知らぬ人と仲良くなりたい(なれた)。
1-4 I.E.F.の活動は楽しい(かった).
1-5 I.E.F.では, 会話の仕方を身につけたい(ついた).
1-6 I.E.F.の活動は役に立つと思う(立った).

日常でのコミュニケーションへの動機づけ

2-1 人と会話をするとき, 自分の好きなことを話したり聞いたりできると思う.
2-2 相手に自分の話をしたり, 相手の話を聞いたりするとうれしいと感じる.
2-3 会話することを通じて, いろいろな人と仲良くなることができると思う.
2-4 人と会話することが好きだ.
2-5 いろいろな人と会話をすることで, 会話の仕方や能力が身に付くと思う.
2-6 他人とうまく会話できると日常生活や将来に役立つと思う.

I.E.F.に対する意識を問う自由記述設問

・事前調査
1. I.E.F.の活動に参加するきっかけはなんですか？ なぜ参加しようと思いましたか？
2. I.E.F.の活動に参加してどんなことができるようになると思いますか？　どんなことができるようになりたいですか？
3. I.E.F.の本番に向けて, どのような練習や対策を行っていますか？
4. I.E.F.の本番に向けて, 自分で心がけていることはありますか？また, 自分で気をつけたいと思う所はありますか？

・直後調査
1. 今日のI.E.F.で,「うまくいった！」「こんなことができた！」とうれしく思うことはなんですか？　どうして「うまくいった」「できた」と思いますか？
2. 今日のI.E.F.で,「失敗しちゃった」「うまくできなかった」と悔しく思うことはなんですか？　それらは, どうすれば防げたと思いますか？
3. 今日のI.E.F.の大会に参加して, 良かったと思いますか？　良くなかったと思いますか？　どのようなことが良かった／良くなかったと思いますか？
4. 今日のI.E.F.の大会に参加して, 何か新しいことに気付いたり, 学んだりしたことがあったら, 教えてください.

・事後調査
1. I.E.F.の本番と練習を通じて, 人と会話をする時に, どんなことに気をつけていましたか？
2. I.E.F.の活動を通じて, どんなことを学んだり, 得ることができたと思いますか？
3. I.E.F.に参加して良かったと思いますか？どうしてそう思いますか？理由も聞かせてください.
4. I.E.F.に取り組む前の自分と, 今の自分を比べてみて, 何か違いを感じていますか？

資料２・量的分析の記述統計量（抜粋）

設問	時点	平均	最頻値	標準偏差	平均の差	分散	尖度	歪度
1-1	事前	5.29	6	0.82		0.70	0.89	-1.12
	直後	4.31	5	1.35	-0.98	1.88	-0.08	-0.65
	事後	4.19	4	1.07	-1.10	1.18	0.78	-0.40
1-2	事前	5.29	6	0.91		0.84	-0.06	-1.01
	直後	3.86	4	1.28	-1.43	1.69	-0.04	-0.56
	事後	4.00	4	1.21	-1.29	1.51	-0.69	0.00
1-3	事前	5.26	6	0.93		0.88	0.33	-1.12
	直後	5.52	6	0.76	0.26	0.60	3.81	-1.92
	事後	5.29	6	0.93	0.02	0.89	-0.30	-0.98
1-4	事前	5.21	6	1.12		1.29	4.58	-2.01
	直後	5.10	6	1.13	-0.12	1.31	0.83	-1.22
	事後	5.12	6	1.07	-0.10	1.18	3.54	-1.56
1-5	事前	5.64	6	0.65		0.43	5.65	-2.19
	直後	4.79	5	0.89	-0.86	0.81	-0.75	-0.19
	事後	4.64	5	0.81	-1.00	0.67	-0.22	-0.35
1-6	事前	5.60	6	0.79		0.64	9.43	-2.74
	直後	5.50	6	0.73	-0.10	0.55	2.08	-1.51
	事後	5.40	6	0.69	-0.19	0.49	-0.58	-0.76

設問	時点	平均	最頻値	標準偏差	平均の差	分散	尖度	歪度
2-1	事前	4.90	5	1.15		1.36	2.39	-1.46
	直後	5.12	5	0.82	0.21	0.69	-0.65	-0.50
	事後	5.00	5	0.87	0.10	0.78	-0.08	-0.67
2-2	事前	4.98	5	0.99		1.00	0.54	-0.87
	直後	5.14	6	0.91	0.17	0.86	-0.63	-0.68
	事後	5.10	6	1.09	0.12	1.21	1.16	-1.24
2-3	事前	5.45	6	0.82		0.69	6.07	-2.11
	直後	5.33	6	0.81	-0.12	0.67	-1.13	-0.70
	事後	5.40	6	0.69	-0.05	0.49	1.97	-1.21
2-4	事前	5.24	6	1.00		1.02	6.74	-2.16
	直後	5.29	6	0.93	0.05	0.89	0.37	-1.17
	事後	5.29	6	0.88	0.05	0.79	0.20	-1.05
2-5	事前	5.57	6	0.76		0.59	10.53	-2.78
	直後	5.38	6	0.84	-0.19	0.73	4.67	-1.83
	事後	5.26	5	0.73	-0.31	0.54	0.79	-0.85
2-6	事前	5.67	6	0.56		0.33	1.51	-1.53
	直後	5.36	6	0.84	-0.31	0.72	4.58	-1.78
	事後	5.55	6	0.59	-0.12	0.35	-0.06	-0.93

資料３・対応のある一要因分散分析の結果

		平方和	自由度	平方平均	F値	p値	
1-1	グループ間	30.33	2.00	15.17	21.08	0.00	****
	グループ内	95.02	41.00	2.32			
	誤差	59.00	82.00	0.72			
	合計	184.36	125.00				
1-2	グループ間	52.00	2.00	26.00	28.05	0.00	****
	グループ内	89.71	41.00	2.19			
	誤差	76.00	82.00	0.93			
	合計	217.71	125.00				
1-3	グループ間	1.76	2.00	0.88	1.66	0.20	
	グループ内	53.60	41.00	1.31			
	誤差	43.57	82.00	0.53			
	合計	98.93	125.00				
1-4	グループ間	0.33	2.00	0.17	0.26	0.78	
	グループ内	101.43	41.00	2.47			
	誤差	53.67	82.00	0.65			
	合計	155.43	125.00				
1-5	グループ間	24.57	2.00	12.29	26.45	0.00	****
	グループ内	40.26	41.00	0.98			
	誤差	38.10	82.00	0.46			
	合計	102.93	125.00				
1-6	グループ間	0.76	2.00	0.38	1.21	0.30	
	グループ内	42.83	41.00	1.04			
	誤差	25.90	82.00	0.32			
	合計	69.50	125.00				

		平方和	自由度	平方平均	F値	p値	
2-1	グループ間	0.97	2.00	0.48	0.68	0.51	
	グループ内	57.66	41.00	1.41			
	誤差	58.37	82.00	0.71			
	合計	117.00	125.00				
2-2	グループ間	0.62	2.00	0.31	0.51	0.60	
	グループ内	76.36	41.00	1.86			
	誤差	49.38	82.00	0.60			
	合計	126.36	125.00				
2-3	グループ間	0.30	2.00	0.15	0.31	0.73	
	グループ内	36.16	41.00	0.88			
	誤差	39.70	82.00	0.48			
	合計	76.16	125.00				
2-4	グループ間	0.06	2.00	0.03	0.07	0.94	
	グループ内	70.83	41.00	1.73			
	誤差	39.94	82.00	0.49			
	合計	110.83	125.00				
2-5	グループ間	2.05	2.00	1.02	1.88	0.16	
	グループ内	31.69	41.00	0.77			
	誤差	44.62	82.00	0.54			
	合計	78.36	125.00				
2-6	グループ間	2.05	2.00	1.02	2.43	0.09	+
	グループ内	22.76	41.00	0.56			
	誤差	34.62	82.00	0.42			
	合計	59.43	125.00				

+ : $p < 0.1$,　**** : $p < 0.001$

資料４・参考文献一覧

Canale, M. (1983). Form communicative competence to communicative language pedagogy. In J. C. Richards, & R. W. Schmidt (Eds.), *Language and communication*. New York: Longman.

Canale, M., & Swain, M. (1980). Theoretical basis of communicative approaches to second language teaching and testing. *Applied Linguistics*, I(1), 1-47.

Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum.

川喜田 二郎. (1967). 『発想法 : 創造性開発のために』. 中央公論社.

市川 伸一. (2001). 『学ぶ意欲の心理学』. PHP研究所.

廣森 友人. (2005). 「外国語学習者の動機づけを高める3つの要因 : 全体傾向と個人差の観点から」. 『大学英語教育学会紀要』, 41, 37-50.

田中 博晃. (2009). 「3つのレベルの内発的動機づけを高める–動機づけを高める方略の効果検証」. *JALT Journal*, 31*(2)*, 227-250.

長澤 邦紘・田邉 一男. (2001). 「Interactive english forum 1999:茨城県における実践的コミュニケーション能力育成の試み(その1)」.『茨城大学教育学部紀要.教育科学』, 50, 129-144.

長澤 邦紘・田邉 一男. (2001). 「Interactive english forum 1999:茨城県における実践的コミュニケーション能力育成の試み(その2)」.『茨城大学教育学部紀要.教育科学』, 50, 145-158.

※本発表は、発表者の卒業論文『普遍的なコミュニケーション能力と学校外国語教育　～茨城県・英語インタラクティブフォーラムの調査・分析』(2011, 慶應義塾大学湘南藤沢学会刊) より抜粋したものです。論文中には、本発表でご紹介できなかったデータも掲載しておりますので、ご興味ございましたら、以下URLよりご参照ください。

http://enshino.biz/research